

授業で使える作文素材Ⅱ - 3

「元気と笑顔／ぼくの夢」(45～50分)

対象／小学生・中学生・高校生

1. プログラムの趣旨

震災に遭遇したらどうするか。被災者の立場、そしてそれを支援する立場でそれぞれ行動は違うが、いのちを守ることに変わりはない。被災者の気持ちから、どんな支援をすれば他の人のいのちを守ることができるのか考えさせたい。

2. ねらい

震災後の支援を受けた児童の作文から、人のために自分のできることを見つけ行動することの大切さを考え、他人の痛みに共感し、思いやりの心を持って行動しようとする態度を育てる。

3. 展開

段階	学習内容	教師の支援・指導上の留意点
導入 (5分)	①災害のニュースを見たときの気持ちを考える。	・災害の映像を提示し、具体的に考えることができるようにする。
展開 (30～35分)	②作文「元気と笑顔」を読み、話し合う。 ・東日本大震災時はどんな気持ちだったか。 ・支援を通してどのように気持ちが変化したのだろうか。 ・今はどんな気持ちで生活しているだろうか。 ③東日本大震災の時に、自分はどのようなことをしたか振り返り、今後、このような災害時に自分達に何ができるか発表する。	・津波で家族や家を失ったり、原発事故での不安になったりしたことなどを具体的に考えさせる。 ・支援は、相手のことを思いやって行うことが大切であることに気づかせる。 ・気持ちの変化の原因について、発達段階に応じて考えさせたい。仮設生活や避難している人、ふるさとへ帰ることができない人がまだいることを理解させる。 ・自分自身を振り返らせたいうえでグループなどで考えを交流させ、助け合うこと、思いやることの大切さに気づかせる。
まとめ (10分)	④作文「ぼくの夢」を聞く。	・感想をもとにできることをやってみようという実践の意欲を高めたい。

作文：「笑顔と元気」 いわき市立久之浜第一小学校六年 一 大川 瑞貴

「ぼくの夢」 いわき市立久之浜第一小学校六年 一 佐藤 嘉晃

私は、東日本大震災を経験して、たくさんの人に様々な支援を受けてきました。

震災直後は、えん筆やノートなどの学用品、トイレトペーパーや食料品、洋服などを家族と一緒にいただきに行きました。また、学校が始まると、ノートや図書カードを始め、マスクや水ももらいました。この頃は、日常に使う物の物資が多かったと思います。

昨年は、東京の学生の方達を中心となった「豆まき大会」や「星を見よう」などの企画に参加しました。

今年は、夏休みに「長崎で遊んで行かんねプロジェクト」に招待されて、長崎に行きました。この「長崎で遊んで行かんねプロジェクト」は、福島県の子も達に元気を与えたいという思いから計画が始まり、多くのボランティアの方に協力していただいて実現された参加型の支援です。久之浜第一小学校の六年生を中心に十八人が参加しました。

長崎では、ボランティアの方々とはうステンボスに行ったり、いわきではなかなかできない海で遊んだりしました。ハウステンボスでは、ワンピースに出てくるサニー号に乗りました。また、お化け屋敷にも入りました。海では、ビーチバレーをしたり、ペーロンという船に乗って実際にこぐ体験をしました。また、わたしは旅行中、ホストファミリーの荒木さんの家にホームステイしました。荒木さんには、とても優しくしてもらいました。また、一緒に花火をしたり、楽しくお話をしたりしてよい思い出を作ることができました。

「長崎で遊んで行かんねプロジェクト」で、小学校生活の思い出が増えました。このプロジェクトを計画してくださった方のおかげだと思い、とても感謝しています。

その他にも県立美術館で行われた、「若冲が来てくれました」の絵画展や「木村百合子ジャズフルートコンサート」のえんそう会に招待されて参加してきました。これも「元気を与えたい」という参加型の支援でした。

絵画展では、黒い花や白いゾウ、花などの有名な作品を見ることができました。また、プライス夫婦のお話を聞く事ができました。その中で、福島県の人たちのために絵画展を開いてくださったことがとても心に残りました。遠いアメリカからも私達を支援しようとしてくださる方がいることにおどろいたし、心の中がとても温かくなりました。

木村百合子さんのジャズコンサートでは、私たちの学校の「確かなる風」のえんそうをしてくださいました。この曲は、東日本大震災を経験した私たちの思いを作詞家の方が曲としてまとめてくれたもので、みんなで合唱した思い出深い曲です。木村さんが私たちのことを考えてこの曲を選んでくれたのだと思い、母とじっくり聞きました。木村さんのえんそうで「確かなる風」が改めてよい曲だと思いました。

私は、東日本大震災ですごく大変な思いをしてきました。震災はとてもこわかったし、今でも原発のことを不安に思っています。しかし、そのかわりに、たくさんの方から様々な支援をしていただき、普通に生活していたら経験できないようなことを経験するチャンスがもらうことができました。私の家では、特別な用事がない時には招待されたことには積極的に参加しています。母は、

「自分たちの好きなものだけ参加することはいけない。招待されたものは選んではいけない。」

と話しています。私も、支援してくださる方の思いはみな同じなのだから、自分の好みで選んではいけないのだと思います。

昨年参加型の支援に取り組むようになって、震災前のように明るい気持ちで過ごせるようになってきたと思います。特に、ミッキーたちが学校に遊びに来てくれたときはうれしくて、飛び上がりそうでした。みんなも笑顔になったのを覚えています。私は、明るく元気に過ごしたいという気持ちが今までよりも強くなってきました。それは、大変な思いや苦労があっても、私達に参加してもらいたいという思いを持って支援してくれる方がいるからです。その気持ちを大切に、これからの生活を送っていきたいと思います。

そして、楽しく学校生活を送ることで、支援をしてくださった方に、

「私たちは元気です。」

という思いを伝えたいと思います。

私は、支援を通して様々なことを学び、たくさんの方の思いを知ることができました。私が大人になったら、震災や困ったことのある国や県などに支援して、困っている人の力になってあげたいです。そして、今まで様々な方からもらった元気と笑顔を、今度は私が届けたいと思います。それが私のできる恩返しになると思います。

「ぼくの夢」

いわき市立久之浜第一小学校六年 佐藤 嘉晃

三月十一日、ぼくは、東日本大震災のひ害を受けました。地震でガラスや窓がわれたりしました。十分後、とても大きい津波がきました。さらには、火事も起きました。途中でガスボンベも爆発しました。家は、火事にあってはいませんが、津波で全かいでした。火事の起きた所は、鉄骨しか残っていませんでした。

このようにぼくは、東日本大震災を味わいました。そして、このことから夢が一つ出てきました。それは、

「地震に強い家を設計する人になりたい。」

という夢ができました。理由は、震災の後に余震がいっぱいきました。ぼくは、余震がきた時とてもこわかったです。ぼくは、そんなきょうふ心をやわらげてあげたいからです。このようなことからぼくは、家の設計者になりたいと思いました。だから家の構造や地震に強い構造を学んだりしたいです。ぼくは、その夢に向かってがんばります。